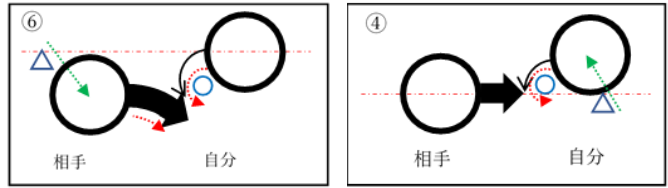


合気道は相手の心に入身をすればいいのです。



道心探求



上の図は、VOL.29の「道心探求」に使用した図④と図⑥である。この2つの図の補足説明をしたいと思う。

図④の場合は、胸を開かず閉じた状態で素早く相手に入身をする人によく見られる。突っ込み型入身だ。一で入身して、二で体(たい)を相手に合わせ、三で相手を崩すパターンになる。だから動作が、一、二、三、となってしまう。故に相手の崩れるタイミングが相対的に見ても絶対的に見てもどうしても遅くなってしまう。遅れを補うために、入身動作を必然的に早くしてしまう

だろう。すると、入身をしてから崩すまでに間(ま)が更に大きくなってしまふ。いわゆる「ため」ができてしまうのだ。そんな人の動きは、視野が狭く、足で畳を蹴り爪先から着地している。それでは、きつと上達が遅れるだろう。

図⑥は、相手の全体をぼんやりと広い視野で見ている。胸を開き、相手を迎え入れながら和合と同時に崩している。すなわち、接触した瞬間から崩しが始まっている。だから、自分はほとんど動く必要はない。自分が入身の状態になった時には、既に相手は崩れているから、楽に投げることが出来る。また、立っている時、重心がやや踵荷重になっている。それは、相手に向かって行っていないからだ。爪先立ちでは前傾になり前方への意識が強くなる。そのため、胸は開かず相手を迎え入れることができないだろう。

図④は速く入身に入ることにより主眼が置かれて、図⑥は崩しに主眼を置いて稽古しているとも言えるだろう。図④のように入身してから崩すのでは、「武」にならない。そういう人に限って、投げる時に踏ん張って、力を込めて投げようとする。何故なら、始めに崩していないからだ。



写真Aは、二教裏の手首関節を極めている場面だ。通常、相手の手首をしっかりと両手で保持し絞るようにして極めて相手を崩すのではないだろうか。それでは、胸は閉じて相手の手首関節を胸で押し込みながら、相手へ向かって行ってしまう。しかし、写真Aでは、胸を開き相手を迎えながら崩している。相手が崩れたから、自然に前傾姿勢となっているだけだ。



写真Bは、二教で相手を裏へ崩し始めている場面。受けの足元を見て頂きたい。踵が浮いている。何故なら、受けの腕を押さえつけていないからだ。力で押さえついたり引っ張ったりしている人をよく見かけるが、良くないことは明白だ。何度も言おう。合気道は、相手を投げてやろうとか、痛くしてやろうとか、決して思ってはならない。また、こちらから相手へ向かって行つてはならない。自分の計らいを先行すると相手の力を

利用することができないからだ。一回一回力まず丁寧に稽古することだ。心の置きどころが変わるだけで、技はガラリと変わるだろう。心の置きどころを探り、丁寧な稽古を積み重ねていくと必ず相手と和合できる。相手と和合すれば、そこには敵(相手)はいない。相手と一体化するからだ。決してハイレベルなテクニクではない。ローレベルテクニク(基本)の積み重ねによる結晶である。



写真は田辺にある高山寺である。ここに合気道開祖が眠っている。昭和四十四年一月一日の本部道場での鏡開き式での演武を最後に体調を崩され、四月二六日午前五時に安らかな眠りにつかれた。八十五歳だった。五月二日午後

合気の旅(高山寺・和歌山県田辺市)

一時より青山葬儀場において神式による本葬が執行された。五月一三日、合気神社において岩間準町葬執行。五月一七日、田辺市市葬執行され遺骨は植芝家菩提寺である高山寺に埋骨された。「合気院盛武円融大居士」の戒名が贈られる。遺髪は、岩間の合気神社、綾部の植芝家墓地、和歌山県の熊野本宮に収められた。世界中の合気道家が開祖に会いに高山寺を訪ねている。境内は広いが、墓所への案内板があり迷うことはない。是非、皆さんも参拝を。



昭和44年5月17日 納骨式



開祖が眠る植芝家のお墓



植芝盛平 墓所
Ueshiba Morihei Grave

～開祖の言葉～

武術こそ和合の道ですよ。和合の道にはずれたもの、なんの役にも立ちません。

「週刊読売」昭和31年5月27日号より

